

J・S・Bach 『クリスマス・オラトリオ』 BWV248 のコラールについての解説

高田重孝

コラール作詞家・作曲家・掲載楽譜・讃美歌一覧

第 1 部

第 5 曲 『Wie sol lich empfangen』 作詞 Peul Gerhard (1607~1676)
作曲 Hans Leo Hassler (1564~1612)
389 Choralgesänge 165,
讃美歌 136 番、讃美歌 21 311 番, ルーテル教会讃美歌 81 番

第 2 部

第 12 曲 『Brieh an,o schönes Morgenlicht』 作詞 Johann Rist (1607~1667)
作曲 Johann Schop (1590~1665)
389 Choralgesänge 80, 讃美歌 101 番、讃美歌 21 246 番、ルーテル教会讃美歌 22 番

第 9 曲 『Ach mein herzliebes Jesulein』 【第 1 部】

第 17 曲 『Schaut hin,dort liegt im finstern』 作詞 Martin Luther (1483~1546)
第 23 曲 『Wir singen dir in deinem Heer』 作曲 Maertin Luther (1483~1546)
389 Choralgesänge 323, ルーテル教会讃美歌 23 番
* オルガン小曲集 BWV606 参照 (高田重孝訳)

第 3 部

第 28 曲 『Dies hat er alles uns getan,』 第 1 節 14 世紀の単旋律聖歌
第 2 節 ~ 6 節、作詞 Martin Luther (1483~1546)
389 Choralgesänge 108,
* オルガン小曲集 BWV604 参照(高田重孝訳)日本の讃美歌には訳されていない。

第 33 曲 『Ich will dich mit Fleiß bewahren』 作詞 Paur Gerhardt (1607~1676)
作曲 Johann Georg Ebeling (1637~1676)
389 Choralgesänge 335、ルーテル教会讃美歌 472 番

第 35 番 『Seid freh dieweil』 作詞 Kaspar Für (1592)
作曲者不明、
掲載讃美歌 『Wir Christen leit hohn jetz und Freud』 (Dresden ・1593 年出版)
389 Choralgesänge 381、

第4部

第42曲 『Jesus, richte mein Beginnen』 作詞 Johann Rist (1607~1667)
作曲 Johann Schop (1590~1665)
389 Choralgesänge 173

第5部

第46曲 『Dein Glanz all Finsternis verzehrt』 作詞 Adam Reusne (1533)、
* 詩編 31 篇による宗教詩より、
作曲者不明 旋律 『In dich hab ich gehoffet, Herr』 (Nürnberg ・ 1581 年出版)
* オルガン小曲集 BWV640 参照(高田重孝訳)日本の讃美歌には訳されていない。

第53曲 『Zwar ist solche Herzensstube』 作詞 Johann Franch (1655)、
旋律 Heinrich Albert の旋律による
旋律 『Gott des Himmels und der Erden』 (Darmstadt ・ 1687 年出版)
389 Choralgesänge114、コラールハンドブック 70、ルーテル教会讃美歌 208 番

第6部

第59曲 『Ich steh an deiner Krippen hier』 作詞 Paul Gerhardt (1656)
作曲 Johann Crüger (1598~1662)
389 Choralgesänge 263, コラールハンドブック 68 番
同じ歌詞による違う旋律、讃美歌 107 番、讃美歌 21 256

第64番 『Nun seid ihr wohl gerochen』 作詞 Georg Werner(1648)
原曲 Hans Leo Hassler (1564~1612)
389 Choralgesänge165, コラールハンドブック、69 番、59 番参照

【コラール解説】

第1部・第5曲 『Wie soll ich empfangen』

歌詞 パウロ・ゲルハルト(Paul Gerhardt 1607~1676)

Bach の『マタイ受難曲』の中で繰り返し用いられている『受難のコラール・Passion Choral』と呼ばれていて、受難週の讃美歌を代表するコラール。

クリスマス・オラトリオの全体的な雰囲気はクリスマスの歓喜を祝っているが、キリストが世の罪を贖うためにこの世に生まれてくださった。罪を贖うただひとつの方法、キリストが十字架に架かり我らの罪を贖い給うたというキリストの犠牲への思いも、このカンタータの重要な役割を担っている。そのために『受難の讃美歌・わが心の切なる願い・Herzlich tut mich verlangen』が、オラトリオ全曲の最初と真中と最後のコラールとして歌われている。

バッハはこの旋律ゆえに、クリスマス第1日の礼拝では場違いのこの讃美歌を選んでいる。バッハはあえて典礼上の規定を無視してまでも、クリスマスの本当の神学的意味を示したかった。『主イエスの生誕と共に、イエスの受難の道も始まることを示そうとした』。第6部最終合唱では、同じ旋律を装飾的に長調にすることにより、イエスの誕生は十字架の上での死による罪の贖いにより喜びに変わることを示している。『クリスマス・オラトリオ』の最初と真中と最後において、クリスマスの本当の主題である十字架への暗示がなされている。

歌詞は Peul Gerhardt の作詞。 受難の主イエスの『御頭』に思いを寄せるこの讃美歌は、クレルヴォーのベルナルデゥスの弟子で、ベルギーのシトー派修士アルヌルス・フォン・レーヴェンの『十字架について苦しむキリストの御体への祈り』と言うラテン語の詩に基づいている。主の御体のひとつひとつに十字架の苦しみを思う連作詩の第7節『主の御頭に』をドイツ語訳にした歌詞が基になっている。しかしゲルハルトの信仰と詩の魂が、ラテン語からの翻訳の範疇を越えたドイツ語訳になっているためにドイツ語讃美歌の最高傑作となっている。ゲルハルトは宗教改革をしたマルチン・ルター (Martin Luther ・1483-1546)以後、最大のドイツ語讃美歌作者である。ゲルハルトはヴィッテンベルク近郊で生まれ、神学をヴィッテンベルク大学で学び、しばらく同地とベルリンで教師をした後、1657年にベルリンのニコライ教会牧師になった。その時のニコライ教会のカントール (音楽監督) がクリューガー (Johann Crüger ・1598-1662)だった。クリューガーの編集した讃美歌集『歌による敬虔の訓練・Praxis Pietatis Melica』1656年に掲載されて、瞬く間にドイツ全土で歌われるようになった。二人が出会って以来、ドイツ讃美歌史上の燦然と輝く不屈の名作が数多く生み出された。ルター主義の忠実な信奉者だったゲルハルトは、領主のカルヴァン派との融合政策に反対してベルリンを離れ、地方のリュッペンの牧師として残りの生涯を過ごした。彼の生涯は悲惨な30年戦争と重なっていて、個人的にも妻や子供に先立たれるなど、多くの苦しみに満ちた生涯だった。その中に在って、ひたすら神の恵みに信頼して、キリストのよる慰めを歌った彼の讃美歌は、当時の悲惨な戦争と蔓延するペストの只中にある多くのドイツ国民の人々の心の支えとなった。聖書の御言葉を土台とする彼の宗教詩は、ルター派でありながら教義的にならず、燃え立つような信仰心と人間的情熱にあふれている。正統主義と敬虔主義の時代の境に位置した宗教詩人だった。

作曲 ハンス・レオ・ハスラー (Hans Leo Hassler 1564-1612) ルターを尊敬していた作曲家の世俗歌『わが心は千々に乱れ』と言う恋の歌が元歌。

『新しいドイツ語の歌の喜びの園・Lustgarten neuer deutscher Gesäng』 (Nürnberg, 1601) に収録された5声の合唱曲。この美しい旋律はすぐに讃美歌に転用されて『心より憧れのぞむ・Herzlich tut mich verlangen』と題して、死に臨む歌詞が付けられ、『聖なる調和・Harmoniae Sacrae・第3版』 (Görlitz, 1631) に収録された。旋律の曲名としては今でもこの名前が用いられている。1656年、Praxis Pietatis Melica でゲルハルトの歌詞と結びつけたからは、こ

の曲と歌詞は切り離すことができなくなった。

Hassler は、ニュールンベルクでオルガニストをしていた父から音楽教育を受け、20歳の時、イタリアのヴェネチアに行き、ヴェネチア楽派の祖と言われるアンドレア・ガブリエリ(Andrea Gabrieli 1520~1580)より多くの影響と作曲技法を学んだ。翌年1585年、ドイツに戻りアウグスブルグ(Augsburg)でオルガニストを務めながら作曲に専念して、有名なCanzonetteを含む作曲集が1588年から次々と出版された。1601年にニュールンベルク、1604年にウルム(Ulm)等のオルガニストを務め、1608年、ドレスデン(Dresden)にある選帝侯(Kurfürst)の礼拝堂オルガニストとなった。1612年、マティアス皇帝の即位式に列席のために選帝侯ゲオルク1世に随行中にフランクフルトで突然に客死した。器楽曲や声楽曲等を多数作曲して当時のドイツにおける一流の作曲家として名を残している。

編集 ヨハン・クリューガー (Johann Crüger 1598~1662)

1600年代、ドイツの最高の讃美歌作曲家と言われている。プロシアのグロスブレゼンで生まれヴィッテンベルク大学で神学を学び、1622年から40年間、ベルリンのニコライ教会のカントール(音楽監督)、Groy Cloisterのギムナジウムの教師を務めた。彼は会衆歌唱に適する曲集を編集して、自らも多くの作曲をしている。『イエスは喜び・Jesu meine Freude・BWV610』は彼の代表作として、Bachもこの旋律により多くの傑作を残している。

ヨハン・クリューガーはベルリンの聖ニコライ教会の音楽監督・カントールを40年間務めた人物。1653年の作詞と同時に作曲され出版された。

クリューガーが生きた時代は、30年戦争や蔓延するペストの流行により、多くのドイツ人が亡くなった悲惨な時代だった。その中に在ってクリューガーの讃美歌は、多くに人々に慰めと希望を与えた。彼の作品は最上のコラルの旋律を書いた作曲家として讃美歌史上に残っている。1500年代の宗教改革期の讃美歌は教会の公同性を重んじ、個人的な宗教感情の表出を厳しく抑制した。宗教改革(1517年)より100年が経つと、教会の公同性よりも個人的な宗教感情表現が宗教詩として定着して、イエスへの愛を直接的に歌う『イエスの歌・Jesuslied』として、より会衆に親しまれ愛され好まれるようになった。その点でもこの讃美歌は1600年代の讃美歌の特徴を良く表わしている。

生涯 ヨハン・クリューガー (Johann Crüger 1598~1662)

ヨハン・クリューガーは1598年、ニーダーラウジッツのグロスブレゼンという小さい村に生まれた。現在はゲーベン市の1部となっている。クリューガーの父親はこの小さな村のレストラン兼居酒屋を営んでいた。母親は同じ村の牧師の娘だった。12歳の時、ゲーベンのラテン語学校に通い、そこでラテン語と音楽を学んだ。ゲーベン市教会(Stadtkirche)で少年聖歌隊員になり、3年間正規の音楽の訓練を受けた。15歳になると、クリューガーはニーダーラウジッツで最も古い町ゾーラウ(現ポーランドZary)において遍歴学生として修業を始めた。さらにプレスウラのギムナジウムを経てモラヴィアのオルモーツ(現チェコ)の町のイエズス

会の神学院で学んでいる。(プロテスタントとカトリックによる 30 年戦争が始まる 4 年前のことである。)その後 1 年間、南ドイツのレーゲンスブルクでカントールのホンベルガーから体系的音楽理論を学んだ。ホンベルガーは同時代のイタリア・ヴェネツィアの音楽の大家、ジョヴァンニ・ガブリエーリ (Giovann Gabrieli 1532~1585) に学んだ最も進歩的作曲家だった。その後さらにバイエルン、ボヘミア、オーストリア、ハンガリー、モラヴィア、ザクセンと音楽修行の旅を続けた。1620 年・22 歳の時、ヴィッテンベルク大学で神学を学んだ。当時の教会音楽家にとって神学は必須であった。大学在学中から既に作曲者として知られはじめ、1622 年・24 歳でベルリン市の主要教会であるニコライ教会カントールと、ギムナジウム・ツム・グラウエンクロースターの教師として招聘された。カントールとして毎日行われる礼拝の音楽を担当していた。音楽教師としてギムナジウムでは礼拝のための聖歌隊の訓練、歌や音楽理論の他、数学まで教えている。この時代クリューガーは『音楽概論・Synopsis musica』を著して出版している。1628 年・30 歳の時、市参事会員の未亡人でベルナウの市長の娘のマリアと結婚。幸せな時間が続くと思っていた時に、同居していた母とマリアとの間に生まれた 5 人の子供達を次々に亡くし、そして妻マリアも失った。1630 年~1640 年、クリューガーが 30 代前半から 40 代前半にかけての出来事だった。この 10 年間は作曲も出版も一切なされていない。家族を全て奪われた深い虚無感と悲しみがクリューガーから創作意欲を奪い取ってしまった。

1637 年、クリューガー (38 歳) は 2 番目の妻エリザベートと結婚した。若い 17 歳の居酒屋の娘エリザベートはクリューガーを励まし、クリューガーの精神は徐々に回復して音楽に取り組み始めた。エリザベートとの間には 14 人の子供が生まれた。1642 年・43 歳、クリューガーは『新しいあらゆる用途に対応した讃美歌・Neues vollk ömliches Gesangbuch』と名付けた讃美歌集を出版した。ベルリンで初めてのルター派の讃美歌集である。この画期的な讃美歌集は、ルター派正統主義の伝統に立ちつつ、当時あまり歌われなくなっていた讃美歌を削除したこと、教会での使用がためらわれていた叙情的なものを含む新たな讃美歌を積極的に採用した。この讃美歌の表題に『新しい慰め』とあるが、当時の 30 年戦争で疲弊し荒廃しきったドイツの人々の魂が求めていたものは『慰め』に他ならなかった。表題の中にヨハン・ヘールマン (Johann Heermann 1585~1647) の名前が挙げられている。ヘールマンは『シュレジアのヨブ』と呼ばれていた人物で、クリューガーと同じ時代に生き、同じように家族を全て亡くした経験を持つ詩人であり、ヘールマンが書いた讃美歌には当時に人々が渴望した『神からの慰め』が満ちていた。『神からの慰め』を歌っているヘールマンの詩に、同じ経験を持つクリューガーが『神からの慰め』の曲を付けている。讃美歌の表記は、四声体と通奏低音番号付きの伴奏を入れて、色々な形態で演奏できるように工夫がされている。表記には「礼拝ばかりでなく、小さな集会や個人でも使える讃美歌」と記されている。

クリューガーはその後、1647 年に 1642 年の讃美歌集を改訂した『歌による信仰の訓練・Praxis Pietatis Melica』を出版した。この初版の中にパウル・ゲルハルト (Paul Gerhardt 1607~1676) の 18 曲の新しい賛美歌が加えられた。この讃美歌はその後 100 年に渡りプロテスタント讃美歌の標準となり、クリューガーの死後も改訂が続けられ、時代とともに新しい賛美歌が加えら

れて、1736 年に出された 44 版には 1316 曲の讃美歌が収められている。

ルター派の信仰に立っているクリューガーだが、カルヴァン改革派の選帝候の要請に応じて『詩編歌集・Psalmodia sacra』の編集もしている。クリューガーは他の教派に対して常に開かれた姿勢を取っている。若い修行時代に敵対するカトリックのイエズス会の神学院で学んだことも、クリューガーの思想の視野を広げている。思想の広さと豊かな自由が、クリューガーの音楽と讃美歌集にはある。

クリューガーは晩年の 5 年間にニコライ教会の牧師として、ベルリンに戻ってきたパウル・ゲルハルト (Paul Gerhardt 1607~1676) と共に働き、1662 年に 64 歳で死去した。

この時代のコラールの特徴は、30 年戦争と蔓延するペストにより疲弊し荒廃した時代に生きた人々の、絶望的な現実からの神の救いへの渴望と神からの慰めが歌われている。クリューガー自身も深い悲しみの淵と死の恐怖との戦いにもがきながら、神の慰めを求める人々のために讃美歌を作り続けた。これらのコラールは、現在においても、打ちひしがれた人々に慰めと希望の光を与え、弱った信仰を支え続ける力を持っている。

389 Choralgrsange 『Herzlich thut mich verlangen』 165 番, 156~165 番,
讃美歌 136 番、讃美歌 21 311 番, ルーテル教会讃美歌 81 番

『イエスは喜び・Jesu meine Freude・BWV227』について

バッハは当初の計画通り『コラール前奏曲集』の 13 番、クリスマス・降誕祭に置いている。『コラール前奏曲集』では 12 番。

バッハはこの旋律を主題として、葬式用の有名なモテット『イエスは喜び・Jesu meine Freude・BWV227』を作曲している。カンタータ第 64 番第 8 曲 BWV64, カンタータ第 87 番第 7 曲 BWV87,等。オルガンのための編曲として、BWV610, BWV713, 713a ,753、ノイマイスター・コラール集 BWV1105 がある。

J・S・Bach 『教会カンタータ 64 番、81 番』

『モテット・イエスは喜び・Jesu meine Freude・BWV227』【訳詞 高田重孝】

コラール編曲、713, 753, 1105. 4 声コラール集 BWV358、

Evangelisches Gesangbuch 1993 年版【ドイツ・プロテスタント讃美歌集】第 396 番

389 Choralgrsange 195~201 番、『Jesu,meine Freude』

讃美歌 21 525 番。ルーテル教会讃美歌 322 番。

第 2 部・第 12 曲 『Brich an,o schönes Morgenlicht』

作詞 ヨハン・リスト Johann Rist (1607~1667)

17 世紀のドイツにおいて、パウル・ゲルハルトと共に重要な宗教詩人。

リストはハンブルグ近郊のオフエンゼンに生まれ、各地の大学で神学と文学を学び、1635 年から 1667 年の死去までハンブルグ近郊のヴェーデル教会の牧師をしていた。当時最高の詩人と

して皇帝から桂冠詩人の称号を授けられた。音楽家との交流も多く、ショップ (Johann Schop) ゼレ、シュッツ、ハンマーシュミット等が友人だった。リストの葬儀にはシュッツの弟子のベルンハルトが葬儀モテットを作曲している。650 篇ほどの宗教詩を作り、現在でもその中の 5 編がドイツ語讃美歌集 EG (Evangelisches Kirchengesangbuch) に採用されている。原詩は 12 節だが、EG では 8 節に省略され、讃美歌 21、215 番では更に 4 節にまとめている。

作曲ヨハン・ショップ Johann Schop (1590~1665)

ニーダーザクセンに生まれた。ヴォルフエンビュッテル、デンマークのコペンハーゲンの宮廷楽師を経て 1621 年以後はハンブルグに落ち着き、ハンブルグにいたシャイデマン、ゼレ、ヤコブ・プレトリウス等の音楽家たちと共に、17 世紀半ばのハンブルグ楽派の全盛時代を作り上げた。桂冠詩人リストと親しかったので、彼の詩に多くの曲を付けている。原曲は 4 声体コーラルではなく、通奏低音付き独唱歌曲として作られ芸術的宗教歌曲だった。パッサは『マタイ受難曲』の後半、ペテロの裏切りの直後【第 40 曲】にこのコーラルの 5 節を歌わせている。389 Choralgesänge 80 番, 『Ermuntre dich, mein schwacher Geist』ルーテル教会讃美歌 22 番

第 1 部・第 9 曲 『Ach mein herzliebes Jesulein』 3 曲とも同じ旋律による

第 2 部・第 17 曲 『Schaut hin, dort liegt im finstern』

第 2 部・第 23 曲 『Wir singen dir in deinem Heer』

作詞 マルチン・ルター・Martin Luther (1483~1546)

作曲 マルチン・ルター・Martin Luther (1483~1546)

天のかなたから、御使いは来たり・Vom Himmel hoch, da komm ich her・BWV606

『天のかなたから、御使いは来たり・Vom Himmel hoch, da komm ich her・BWV606』と『御使いの群れが、天よりあらわれ・Vom Himmel kam der Engel Schar・BWV607』は共に、野宿しながら羊の世話をしている羊飼いたちの前に、突如に現われた万軍の天使の群れの物語 (ルカによる福音書第 2 章 8~20 節) を取り上げて主題としている。ルターはこの讃美歌を 1535 年のクリスマスに、自分の子供達への贈り物として作詞したと言われている。この頃からクリスマスの行事が教会だけではなく、各家庭にも浸透して教会行事の祝い事として行われるようになってきた。宗教改革当時 1524 年以降、礼拝のための新しい讃美歌を作ることが、教会の急務のひとつであったが、現実的にはそれほど作曲ができる人物がルター派の中には多くいなかった。この問題の解決法としてルター派が現実的にしたことは、当時流行していた『流行歌』の旋律に合わせて、教会讃美歌を作詞して当てはめ『替え歌として讃美歌を作る手法』が用いられた。この讃美歌『天のかなたから、御使いは来たり・Vom Himmel hoch, da komm ich her・BWV606』も当時流行していた『私は見しらぬ国からやってきました・Ich komm' aus fremden Landen her』が元歌と言われている。

バッハはクリスマス・オラトリオの中でこの旋律を3回、第1部・第9曲、第2部・第17曲、第23曲に使用している。コラールの甘美な旋律を最後に歌う時、オーケストラは序曲の天上から聞こえるパストラレ【第2部の導入部】を引用してコラールの各行を閉じている。それによってカンタータの初めと終わりをしっかりと繋ぎ合せている。

この讃美歌は歌詞が作られた1535年のクリスマス以後に出版され、クリスマス第1日の『夕べの祈り』において歌われるようになり、後にはクリスマスの主要な讃美歌として定着した。バッハ自身、この讃美歌を好んで、他のオルガンのための編曲（BWV 700, 701, 738, 738a）に用いているし、クリスマス・オラトリオ BWV248, 第2部、第9曲、第17曲、第23曲。マニフィカート BWV243a・初期稿にも採用している。

コラール編曲、700、701、738、738a、769、

Evangelisches Gesangbuch 1993年版【ドイツ・プロテスタント讃美歌集】第24番

389 Choralgrsange 323番、【訳詞 高田重孝】『Vom Himmel hoch da komm ich her』

讃美歌 101番、讃美歌 21 246番。ルーテル教会讃美歌 23番。

*オルガン小曲集 BWV606 参照（高田重孝訳）

第3部・第28曲 『Dies hat er alles uns getan,』

第1節 14世紀の単旋律聖歌

第2節～6節、作詞 Martin Luther (1483-1546)

讃えよ、主イエスを・Gelobet seist du ,Jesu Christ・BWV604

原詩は単旋律聖歌の続唱（セクエンシア・Sequentiae）『Gretes nunc omnes reddamus・今、主に感謝をささげる』のラテン語からのドイツ語訳である。現在確認できる一番古い文献は、北ドイツ、リューネブルク近郊にあるシトー派女子修道院が所蔵する手書きの聖務日課の時禱集であり、この時禱集は1380年に作成されている。当初は1節のみの聖歌であったが、カトリック教会で好まれて歌われているうちに歌詞が5節にまで付けられて歌われ続けられた。宗教改革の時期に（1524年以後）ルターによって更に手が加えられて、5節の歌詞が2節増えて7節にまで拡大されて、現在の形に編纂された。

この讃美歌は1524年の出版当初からクリスマスの第1祝日（12月25日）の主要な讃美歌のひとつであり、今日に至るまで歌われ続けている。旋律も当時の続唱（セクエンシア・Sequentiae）の旋律のままと言われている。旋律は教会第7旋法『ミクソ・リディア調』であり、ミクソ・リディア調は長旋法であり、音階の第7音が半音下がっている特徴を持つ旋法である。讃美歌の各節の最後に『キリエライス』が付いている。これらは『ライス』または『ライゼン』と呼ばれている。この起源は古く、カトリック教会の『リタニー・連禱』に由来している。司祭によって祈られる一連の連禱や、祈りや願いの後に、会衆が応答として『キリエ・エレイソン・Kyrie eleison。主よ、憐れんでください』と繰り返して応答していた名残がそのまま讃美歌の中に定着していった。『Kyrie』と『eleison』の共通する母音『エ』がリエゾンして『キリエレイソン』になり、語尾の『on』が落ちて『ei』がドイツ語の発音で『アイ』に

変わり『キリエライス』が生じて定着した。この『キリエライス』も宗教改革当初から礼拝の中に会衆が参加し始めたことを示す歴史的証拠である。

J・S・Bach 『教会カンタータ 64 番、91 番』 『クリスマスオラトリオ BWV248 第 7 曲、第 28 曲』

コラール編曲、697, 722, 723、

Evangelisches Gesangbuch 1993 年版【ドイツ・プロテスタント讃美歌集】第 23 番

389 Choralgsrange 107~110 番。『Gelobet seist du, Jesu Christ』

讃美歌 21 には採用されていない。(訳詞・高田重孝訳)

* オルガン小曲集 BWV604 参照 (高田重孝訳) 日本の讃美歌には訳されていない。

第 3 部・第 33 曲 『Ich will dich mit Fleiß bewahren』

作詞 Paur Gerhardt (1607~1676) * 第 5 曲の作詞者を参照

作曲 Johann Georg Ebeling (1637~1676)

389 Choralgesänge 335 番、『Warum sollt' ich mich den grämen』

ルーテル教会讃美歌 472 番

作曲 Johann Georg Ebeling (1637~1676)

エベリンク (Ebeling) はリューネブルク (Lüneburk) に 1637 年 7 月 8 日に生まれ、ステッテン (Stettin) で 1676 年 12 月 4 日に死去した。

ドイツの讃美歌の編集と作曲に大きな力を発揮した。特にゲルハルトと同時代を生き、ゲルハルトの詩に作曲している。1667 年に 120 曲を掲載した讃美歌集『Geduld, die soll'n wir haben』『Geistliche Lieder,』をゲルハルトと共に出版。そのうちの 26 曲がエベリンクの新曲となっている。その中に有名な『Du meine Seele singe』(讃美歌 21・170 番)が含まれている。

第 3 部・第 35 番 『Seid freh dieweil』

作詞 Kaspar Füler (1592)

作曲者不明、

掲載讃美歌『Wir Christen leit hohn jetzt und Freud』(Dresden・1593 年出版)

389 Choralgesänge 379~381 番、『Wir Christenleut'・我らキリスト教徒達』

第 4 部・第 42 曲 『Jesus, richte mein Beginnen』

作詞 Johann Rist (1607~1667)

作曲 Johann Schop (1590~1665)

389 Choralgesänge 173 番、『Hilf, Herr Jesu, lass gelingen』

第 5 部・第 46 曲 『Dein Glanz all Finsternis verzehrt』

作詞 Adam Reusne (1533)

* 詩編 31 篇による宗教詩より、

作曲 Seth Calvisius (1556~1615)

旋律 『In dich hab ich gehoffet, Herr』(Nürnberg ・ 1581 年出版)

* オルガン小曲集 BWV640 参照 (高田重孝訳) 日本の讃美歌には訳されていない。

主に希望をおき、主は我を支えたもう・ In dich hab ich gehoffet, Herr ・ BWV640

バッハはこの歌詞に 2 種類の旋律による讃美歌の編曲を『コラール小曲集』のために書こうと考えていた。残された自筆譜には、左のページに曲目と 6 段の 5 線が引かれているが、何の書き込みもない。右のページには『alio mode・別の方法で』と書かれて、この曲が記譜されている。書かれなかった曲の旋律は『マタイ受難曲 32 番』『クリスマス・オラトリオ 46 番』『カンタータ 52 番の終曲』に用いられたコラールと考えられている。当時はこちらの旋律で讃美歌が歌われていたからである。

作詞はアダム・ライスナー (Adam Reißner, 1496?~1582?)

ドイツ神秘主義者であり、讃美歌作家、詩人でもあった。1518~1521 年、ハイデルベルク (Heidelberg) 大学でヘブル語とギリシャ語を学び、1523 年にウイッテンベルク (Wittenberg) 大学に転向、ルター (Martin Luther) やメランヒトン (Philipp Melancthon) に神学を学んだ。傭兵の生みの親であるフルンズベルク (Georg von Frundsberg) 将軍の秘書としてイタリアに同行して、後にシレジア地方を中心に『人の世ならぬ哲学』を説いたシュヴェンクフェルト (Kaspar von Schwenckfeld, 1489~1561) の信奉者となり、その運動に加わった。

1530 年以降は、讃美歌のための作詞に力を注ぎ、Bach の『マタイ受難曲』第 32 曲に使用されている『Mir hat Welt trüglich gericht '』(1533 年作詞) などの名詩を残している。

旋律はライプツィヒ教会の合唱長であった S, カルヴィジウス (Seth Calvisius, 1556~1615) の

作曲で、彼の編集した讃美歌集に収められている。冒頭の 5 度の 2 回の跳躍が印象的な旋律で、続く旋律の中の跳躍も力強い印象を与えていて、主に信頼する力強い信仰を表わしている。

教会第 1 旋法『ドリア調』で書かれていて、歌詞に相応しい毅然たる讃美歌である。

J・S・Bach 『教会カンタータ 52 番、106 番』『マタイ受難曲 BWV244, 第 32 曲』『クリスマス・オラトリオ、第 46 曲』

Evangelisches Gesangbuch 1993 年版【ドイツ・プロテスタント讃美歌集】第 275 番

J・S・Bach, 389 Choralgränge 212~214 番、『In dich ha'b ich gehoffet, Herr』

讃美歌 21 には採用されていない。コラールハンドブック 72 番

第5部・第53曲 『Zwar ist solche Herzensstube』

作詞 Johann Franch (1655)

旋律 Heinrich Albert の旋律による

旋律 『Gott des Himmels und der Erden』 (Darmstadt・1687年出版)

歌詞 ヨハン・フランク (Johann Franck 1618~1677)

現在のドイツとポーランドの国境の町ゲーベンに生まれ、ケーニヒスベルク大学で法律を専攻した。1640年・22歳、郷里に戻り弁護士となり開業した。やがて市議会議員、後に市長として活躍した。当時から詩人として知られ、同時代のルター以後最大のドイツの讃美歌作者パウエル・ゲルハルト (Paul Gerhardt 1607~1676) と並ぶ宗教詩人として多くの讃美歌を作詞した。讃美歌作曲家ヨハン・クリューガー (Johann Crüger 1598~1662) と親交があり、クリューガーはフランクの多くの詩に曲を作っていて名作が数多くある。特に有名な曲は『イエスは喜び・Jesu meine Freude』である。Bachもこの旋律を使って『オルガン小曲集, BWV610』『モテット第3番・Motet』を作曲している。

詩・曲(旋律)は最初に第1節だけが『霊的教会の歌・Geistliche Kirchen Melodien』Berlin. 1649年に発表された。残りの全節はクリューガーの有名な讃美歌集『歌による敬虔の訓練・Praxis pietatis Melica』(第5版、Berlin, 1653年)に『聖餐の準備』と題して掲載された。歌詞の中には熱烈な主イエスへの愛と聖餐におけるキリストとの一体化への憧れが歌い上げられている。

作曲 Heinrich Albert (1604~1651)

ローベンシュタイン (Lobenstein) に1604年6月28日に生まれた。

Graのグラマースクール【高等学校】で1619年から1621年まで3年間学び、1622年、ドレスデン (Dresden) でドレスデンの宮廷楽団の指揮者だった、従兄弟のハインリッヒ・シュッツ (Heinrich Schütz・1585~1672) に作曲の基礎を学んだ。1623年ライプツヒ (Leipzig) 大学で法律と音楽の学びを続けた。1630年ケーニヒスベルク (Königsberg) 大聖堂のオルガニストとして招聘され、1631年4月から1647年まで大聖堂のオルガニストを務めた。

ハインリッヒ・シュッツ (Heinrich Schütz・1585~1672) は当時ドイツ最大のプロテスタント音楽の作曲家でヴェネツィア楽派、最大の作曲家ジョバンニ・ガブリエリ (Giovanni Gabrieli・1557~1612) に学び、ガブリエリのもとで複合合唱の作曲手法とイタリア・マドリガルの表現手法を学んだ。1615年に中部ドイツ最大の君主ザクセン選帝侯ヨハン・ゲオルク1世の要請により、ドレスデン宮廷楽団の指揮者となり、1617年、宮廷礼拝堂の専任作曲者となり、多くの宗教合唱曲を作った。シュッツの合唱曲は年代的にバッハに100年先駆けているが、深い宗教性ゆえにバッハにも多くの影響を与えている。シュッツは1621年以後1672年の死去までドレスデンの宮廷楽長の職にあった。

最晩年にヴァイセンヘルツに隠退したが、1644年『クリスマス・オラトリオ』1665～1666年『ルカ受難曲』『ヨハネ受難曲』『マタイ受難曲』の名作を残している。シュッツはルター訳のドイツ語聖書の御言葉と神秘主義的な宗教詩をテキストに用いて、音楽的にも宗教的にも極めて深い宗教音楽作品を残した。シュッツの『語りかける御言葉』の力は音楽による表現の一致により支えられて、『御言葉の語りかける表現』と音楽的造詣の完全な一致より、神に対する深遠な信仰が音楽により表現され具現化されている。

389 Choralgesänge 114番、『Gott des Himmels und der Erden』

コラールハンドブック 70番、ルーテル教会讃美歌 208番

第6部・第59曲『Ich steh an deiner Krippen hier』

作詞 Paul Gerhardt (1656) *第5曲の作詞者を参照

作曲 Johann Crüger (1598~1662) *第5曲の編集者を参照

389 Choralgesänge 263番、『Nun freut euch, lieben Christen g'mein』

コラールハンドブック 68番、同じ歌詞による違う旋律、讃美歌 107番、讃美歌 21 256

第6部・第64番『Nun seid ihr wohl gerochen』

作詞 Georg Werner(1648) *明細不明

原曲 Hans Leo Hassler (1564~1612) *第5曲の作曲者を参照

389 Choralgesänge 165番、『Herzlich thut mich verlangen』

コラールハンドブック、69番、59番参照

クリスマス・オラトリオの全体的な雰囲気はクリスマスの歓喜を祝っているが、キリストが世の罪を贖うためにこの世に生まれてくださった。罪を贖うただひとつの方法、キリストが十字架に架かり我らの罪を贖い給うたというキリストの犠牲への思いも、このカンタータの重要な役割を担っている。そのために『受難の讃美歌・わが心の切なる願い・Herzlich tut mich verlangen』が、オラトリオ全曲の最初と真中と最後のコラールとして歌われている。

クリスマス・オラトリオの基調をなす主題は、神の御子の誕生は、イエスの十字架での死によって初めて人類が救われることを重要な主題としている。そのために第1部第5曲での『血潮したたる主の御頭・Wie soll dich empfangen』の短調の旋律主題が、第6部第64曲では、死に打ち勝った十字架のキリストの輝ける栄光と勝利を表わすために、短調の旋律主題が、長調に転じて華やかに演奏される。この転調こそが、死がもたらす絶望と悲しみと不安から救って下さる、我々の罪のために十字架に架かって死んでくださったキリストの死から栄光へ復活したキリストの力を、音楽により神学的に見事に象徴している。

高田重孝・花岡聖子 〒880・0035 宮崎市下北方横小路 5886・3
0985・25・5467、 Fax 0985・22・3628、 携帯 090・5933・4972

Email shige705seiko214@outlook.jp.